

過疎地域における寺院経営  
——種子島・信楽寺を事例として——

星野 元興

**Management of a Buddhist temple in a depopulated area**  
— A case study of Shingyouji Temple on Tanegashima Island —

Motooki HOSHINO

**Abstract**

Some abandoned temples can be found in present-day depopulated areas. This shows that even when such temples have a history of several hundred years, they cannot cope with current and rapid changes to the social environment. To overcome such a situation, Buddhist priests and researchers have made various proposals and adopted several practices. More recently, temples have been expected to play a role as social capital.

This article discusses Shingyouji Temple on Tanegashima Island acting as a medium that connects to the residents of a village. Shingyouji Temple was established as a small non-registered temple (*"koderā"*) at Nogidaira Village in Nishinoomote City, which is a village with migrants from Koshikijima Island, and then it became a registered temple. Though there were once thirty non-registered temples in Nishinoomote City, my field research confirmed only one *koderā* of Nogidaira village. Why would the other *koderas* have disappeared? The outflow of the rural population during the period of high economic growth could help explain the cause, as could the weakening ties among the villagers as a result of changing lifestyles, along with modernization.

Two factors that made it possible to develop the non-registered *koderā* into a registered temple in Nogidaira Village should be pointed out. Firstly, it is the role of a temple as a medium to connect to the residents of the village. In Nogidaira Village, many of the regional events included in monthly religious gatherings have been made through Shingyouji Temple. Thus, the temple has played a role of connecting to the villagers. However, the reason for the persistence of the temple does not always lie in the role of combining the villagers.

Another factor is the existence of the medium that connects the regions. Nogidaira Village has local events that are not related to the temple. In other words, this article points out that Shingyouji Temple has been maintained as a result of the mutual effect of the temple and regional events as a medium that connects to the residents of the village.

キーワード：1. 過疎, 2. ソーシャル・キャピタル, 3. 寺院経営, 4. 小寺, 5. 種子島

**Key Words** : 1. depopulation, 2. social capital, 3. temple management, 4. Koderā,  
5. Tanegashima

## 日本語要旨

現在、過疎地域を中心に伝統ある寺院の廃寺が確認される。それは、数百年継続された寺院であっても、現在の急速な社会環境の変化に対応できていない状況を如実にあらわしている。そうした状況を打開するために、僧侶をはじめ宗教研究者などが様々なアイデアの提案、実践を行っている。また、近年では寺院にソーシャル・キャピタル（社会関係資本）としての役割を期待する声もあがっている。

そこで、本論では、ソーシャル・キャピタルをヒントに、寺院の持つ「地域をつなぐ媒体」としての可能性を種子島にある信楽寺の事例から考察した。信楽寺は、甌島からの移住者集落である西之表市の野木平集落で受継がれてきた「小寺」を寺院へと発展させる形で建立された寺院である。西之表市内には、30ヶ寺の小寺が集落毎に運営されていたが、今回の調査で継続が確認されたのは野木平集落のみであった。なぜ、多くの小寺は消滅したのであろうか。その要因を高度経済成長期における人口の流出にあることを指摘した。また、社会の近代化に伴うライフスタイルの変化も加わり、集落内のつながりが脆弱化したことも廃寺の要因であるとした。

一方で、野木平集落では、小寺を消滅させることなく寺院へと発展させることができた要因を大きく2点指摘した。1つは、寺院が持つ地域をつなぐ媒体としての役割である。野木平集落では、毎月の法会をはじめ多くの地域行事が信楽寺を介して行われ、地域の住民同士をつなぐ役割を信楽寺は果たしている。しかし、地域をつなぐ役割のみが寺院継続の要因とは言えない。もう1つの要因である野木平集落が元来持つ、地域行事などの寺院以外の地域をつなぐ媒体の存在が不可欠であるのである。つまり、寺院の持つ地域をつなぐ媒体としての役割と地域の持つ寺院以外の地域をつなぐ媒体との相互作用によって信楽寺は建立、継続されてきたと考えられるのである。

## 1. はじめに

538年、日本に仏教が正式に伝来し飛鳥寺（法興寺）が建立されて以来、多くの寺院が建立されることとなった。時代を経て仏教寺院は日本社会に受け入れられ、2009年（平成21年）現在、77,496ヶ寺の寺院が日本全国に存在する<sup>1</sup>。

しかし、いつの時代においても寺院経営は容易なものではなかった。現在の「宝くじ」の起源が江戸時代に行われていた寺社の修復費用などの勧進のための「富くじ」に始まることひとつとっても、寺檀制度により手厚い保護を受けていた江戸時代でさえも寺院経営への苦慮が窺える。それは、現在においても同様である。現代社会において、寺院の役割、特に葬儀や法事といった宗教儀礼が、葬儀社をはじめとするサービス産業と融合することにより、それまでの宗教儀礼という役割から、慣習へと変化しつつある中、寺院がこれまで通りの宗教伝道の役割を果たすことは難しくなっている。そのため、都市部を中心に、新規の寺院の設立も確認されるものの廃寺や活動休止といった寺院が全国各地に見受けられるのである。しかし、その廃寺の状況を統計から確認することは難しい。それは、宗教法人を抹消する寺院がある一方で、宗教法人として登記されたまま、実質、活動を停止している寺院が、数多くみられるためである。その実情について、2009年11月30日の「第157回宗教法人審議会議事録」の総務課長の発

1 宗教団体数（宗教法人を含む）としての寺院数。

『宗教年鑑 平成22年版』2011ぎょうせい

言内に、2008年（平成20年）末現在の状況として約4,500法人の不活動宗教法人を確認しているとの旨が示されていることから<sup>2</sup>、全宗教法人約180,000法人のうち約2.5%の宗教法人が宗教法人格を有したまま不活動の状態にあることがわかる<sup>3</sup>。

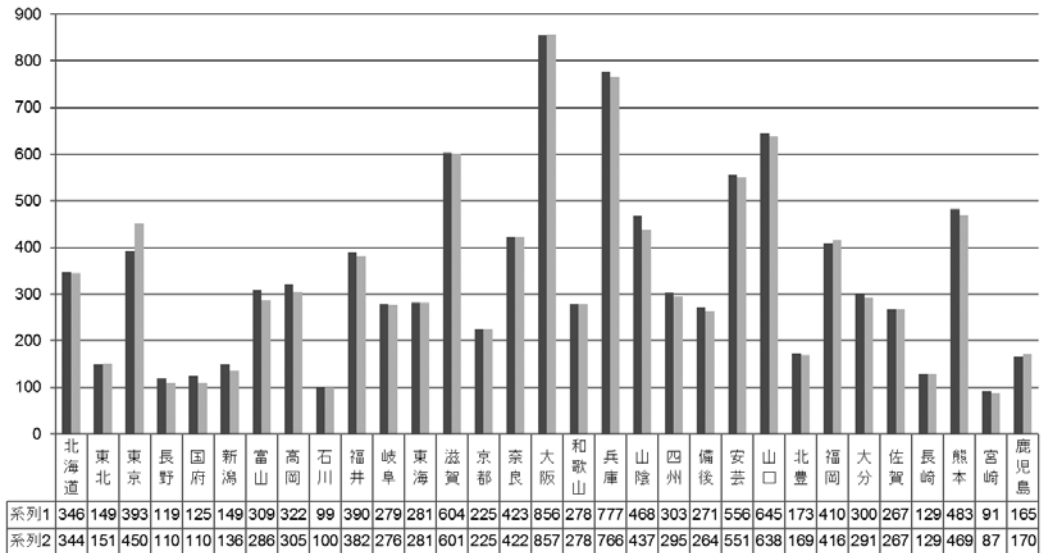


図1 浄土真宗本願寺派 寺院数 系列1（1978年）系列2（2009年）

さらに、廃寺の状況を分析すると過疎地域において特に廃寺問題が深刻化していることがわかる。例えば、浄土真宗本願寺派（以下本願寺派）の寺院数を1978年（昭和53年）と2009年で比較してみる<sup>4</sup>。（図1）その結果、約30年の間に東京、福岡など一部の地域では、寺院数の増加がみられるものの北陸地方、中国地方など人口が減少傾向にある地域を中心に寺院数の減少がみられる。では、過疎地域における寺院活動の現状とは如何なるものであろうか。過疎問題とは、1950年（昭和25年）以降の高度経済成長の過程において全国の地方から都市部へ人口が大量に移動したことに伴い、1970年（昭和45年）に制定された「過疎地域対策緊急措置法」に「最近における人口の急激な減少により地域社会の基盤が変動し、生活水準及び生産機能の維持が困難となっている。」と指摘された問題である<sup>5</sup>。つまり、地方から人が大量に都市部に移動したことにより地方の人口が急激に減少し、地方における地域コミュニティの維持、運営に支障をきたすこととなった問題と言える。その結果、地方においては農作業や漁業などの互助機能や地域消防団、冠婚葬祭など、地域社会で営まれていたコミュニティ機能が失われ始めたのである。そうした地域社会のコミュニティ機能の崩壊がそのまま地域社会の一翼を担って

2 文化庁「第157回宗教法人審議会議事録」

<http://www.bunka.go.jp/shukyouhoujin/shingikai/gijiroku157.html>（2012/5/22閲覧）

3 『宗教年鑑 平成22年版』2011ぎょうせい

4 『寺院名簿編纂委員会』1978本願寺出版部、『浄土真宗本願寺派寺院住所録』2009浄土真宗本願寺派より筆者作成

5 総務省（過疎対策）

[http://www.soumu.go.jp/main\\_sosiki/jichi\\_gyousei/c-gyousei/2001/kaso/kasomain0.htm](http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/2001/kaso/kasomain0.htm)（2012/09/21閲覧）

きた寺院の廃寺へと結びついたと考えられるのである。

このことを、櫻井義秀は、「限界〈寺院・寺社・教会〉」と示し、その概念を「教師（住職、神職、牧師）や信徒の高齢化、及び担い手不足のために宗教団体の存続と活動が危機にさらされているような宗教施設」とする<sup>6</sup>。つまり限界集落と同様、構成人員の高齢化、後継者不在により、コミュニティとしての機能を維持することができなくなった寺院のことを「限界寺院」とあらわしたのである。

確かに地域の過疎、住職の高齢化、そして後継者不在のために廃寺となる事例は、筆者の先行研究からも確認できる<sup>7</sup>。例えば、人口が31,489人の島根県との県境にある広島県安芸高田市の法成寺は、1789年（寛政1年）の開基であり200年以上続いた寺院であったが、後継者の不在により2011年（平成23年）に宗教法人を解散し廃寺となった。法成寺住職には子どもがいなかったが、住職は、親戚の子を幼少の頃より養女に迎え入れ後継者へと考えていた。しかし、地域の過疎化などを理由に、養女が跡を継ぐことはなかった。これはなにも特例を取りあげたわけではない。過疎地域の寺院では、今後の行く末に不安を抱える中、後継者を指名しない、指名できない寺院が多くある。その状況は住職への意識調査からも知ることができる。本願寺派が実施した「第9回宗勢基本調査」によると、20年後の寺院の護持・運営に対する見通しについて、52.5%の住職が「護持・運営はきびしい」と回答し、11.7%の住職は「まったく護持・運営できない」と回答している。そしてその理由に22.8%の住職が「門徒が減っている」ことを挙げている<sup>8</sup>。当然、そのような状況下において若い後継者を指名することは難しく、必然的に廃寺へとむかうのである。先行研究において、同様の事例を富山県、鹿児島県においても確認できた。現在、住職在職中に廃寺となる事例はほとんどなく<sup>9</sup>、後継者の有無が廃寺を決定づける重要な局面である。そして、後継者不在に陥る一因が過疎問題にあることを指摘したのである。

しかし、「限界集落＝限界寺院」と短絡的に捉え寺院運営を簡単に放棄するわけにはいかない。櫻井はこのことについて、「地域の死活問題、より正確に言えば、人口減少による地域社会へのダメージをより緩和し、そこで生まれ育ってきた人が望むのであれば可能な限り長く生活できる環境をどう維持できるのかという課題に、寺院は地域の諸団体と共に取り組むことが求められているのである。それに寺院がいかんして応えられるのかを模索する中で、寺院が果たすべき役割や住職の責務も定まるであろう。」と指摘する<sup>10</sup>。つまり、寺院が、地域をつなぐキーパーソンとなるような活動が、地域をつなぐ媒体としての価値を生み出し、寺院の存続に大きな可能性を残すとするのである。櫻井は、これをソーシャル・キャピタルという言葉を用いて論じている。ここで述べられるソーシャル・キャピタルとは社会関係資本と訳されるものであり、地域社会をはじめ、つながりを持つ者同士の信用、関係性が強まれば、市民活動、

6 櫻井義秀2012「過疎と寺院」大谷栄一・藤本頼生（編）『地域社会をつくる宗教』明石書店p134

7 星野元興2013「真宗寺院にみる廃寺の現状―鹿児島県、富山県、広島県の事例から―」『地域政策科学研究』第10号 pp.121-139鹿児島大学

8 『月刊宗報』7月号付録2008「第9回宗勢基本調査中間報告（単純集計）」浄土真宗本願寺派

9 2010年に破産した浄土真宗東本願寺派永宮寺が初の寺院破産事例だと言われる。（福井新聞2010年8月4日）

10 櫻井義秀2012「過疎と寺院」大谷栄一・藤本頼生（編）『地域社会をつくる宗教』明石書店p150

社会参画への意欲が高まると考えるものである。現在、ソーシャル・キャピタル論は経済学、教育学、社会学など様々な分野において議論される。本論においては、ソーシャル・キャピタル論を通じて、地域住民のネットワークの媒体としての寺院の可能性をあきらかにし、またそれが寺院運営の継続にどのように寄与するかについて考察を深める。

論述の中で、櫻井は、今後の寺院存続の可能性として、地域社会をつなぐ媒体としての寺院の役割に期待するだけにとどまり、「住職は月忌参りで檀家との関係を保ち、高齢者には他出者のために安否確認や相談事にも応じ、地域の要の役割を果たしている。宗祖親鸞の命日前後に報恩謝徳のために報恩講が行われるが、ここに集まる地域の人たちの連帯感は過疎地域に残る数少ない相互扶助の確認の場である。」と示すのみであり<sup>11</sup>、具体的な事例までは示していない。また、櫻井の期待するように寺院が地域社会をつなぐ媒体としての役割を人口が減少し、地域住民、住職が共に高齢化する中、いかに維持し続けられるのかといった問題は依然残ったままである。

そこで、本論では、1989年（平成元年）に、21,542人であった人口が、2008年には、17,382人まで減少し過疎地域対策として地方交付税の補填優遇措置を受けている<sup>12</sup>、鹿児島県西之表市の事例を中心に、過疎地域における寺院活動の可能性についてソーシャル・キャピタルをキーワードに、より具体性を持って明らかにする。

## 2. 西之表市の現況と寺院の現状

西之表市は、種子島の北端に位置し、南は中種子町と接している。種子島へは、現在、鹿児島港より、高速船にて95分、フェリーで3時間30分にて到着する。現在、8,219世帯、人口16,589人が暮らすさつまいもやサトウキビを中心とした農業、そしてとびうお漁などの漁業を中心産業とした種子島の商業中心地である<sup>13</sup>。

また、西之表市をはじめ種子島は、移民受け入れの島でもあった。それは、1878年（明治11年）に8,460人であった西之表市の人口が、1925年（大正14年）には、13,646人に、そして1968年（昭和43年）には29,192人まで増加している数字にも表れている<sup>14</sup>。つまり、明治初めから約100年の間に人口が3倍以上に増加したのだが、その多くが鹿児島本土や甌島、与論島といった地域からの移



図2 種子島地図（種子島観光協会 HP）

11 櫻井義秀2012「過疎と寺院」大谷栄一・藤本頼生（編）『地域社会をつくる宗教』明石書店 p146

12 『統計にしのおもて』 <http://www.city.nishinoomote.kagoshima.jp/jinkou/jinkou.html>（2013/08/05閲覧）

13 西之表市 HP <http://www.city.nishinoomote.kagoshima.jp/>（2013/08/05閲覧）

14 西之表市編纂委員会（編）1971『西之表市百年史』西之表市長名越不二郎 p41

住者もしくはその子孫によるものであったのである。そして、移住者の多くは、未開拓の地を耕作することにより種子島での生活を始めたため、必然的に移住者の出身地毎の集落が西之表市の各地に点在することとなった。西之表市内においては、久保田、白石、野木平、上ノ古田、桜園、柳原、石堂、川氏、桃園、竹鶴、鞍勇、岳ノ田、古田、上之町、七番、平園、平山、芦野、植松、高山、御牧、野木、千段ノ峯、生姜山、十五番、十六番、十三番、万波、二本松、番屋峯の30集落の移住者集落があり<sup>15</sup>、全99集落の約3分の1が移住者による集落である。

特に甑島からの移住者が多く、1886年（明治19年）度の移住だけでも1,380人が甑島から種子島へ移住している。それは前年の1885年（明治18年）の暴風雨被害によるものが大きい。その年、下甑島の手打地区では、本来642石収穫できる田から、わずか6石しか収穫できなかった。下甑島では、それ以前より台風や集中豪雨、害虫被害により作物の不作が続いており、島民からの願いにより移住政策が進められたのである。特に、1886年に多くの移住者が出たのは、先に述べた不作の影響により、国と県からそれぞれ25,000円ずつの補助金が出たことにある<sup>16</sup>。

本論で中心的に調査した野木平集落もまた、こうした状況の下、1886年の集団移住により下甑島（手打地区）からの移住者によって開拓された集落である。入植時こそ世帯数は少なかったが<sup>17</sup>、現在では、移住者の子孫を中心に73世帯が暮らす集落である<sup>18</sup>。入植時の様子を、野木平集落にある移住記念碑により知ることができる。

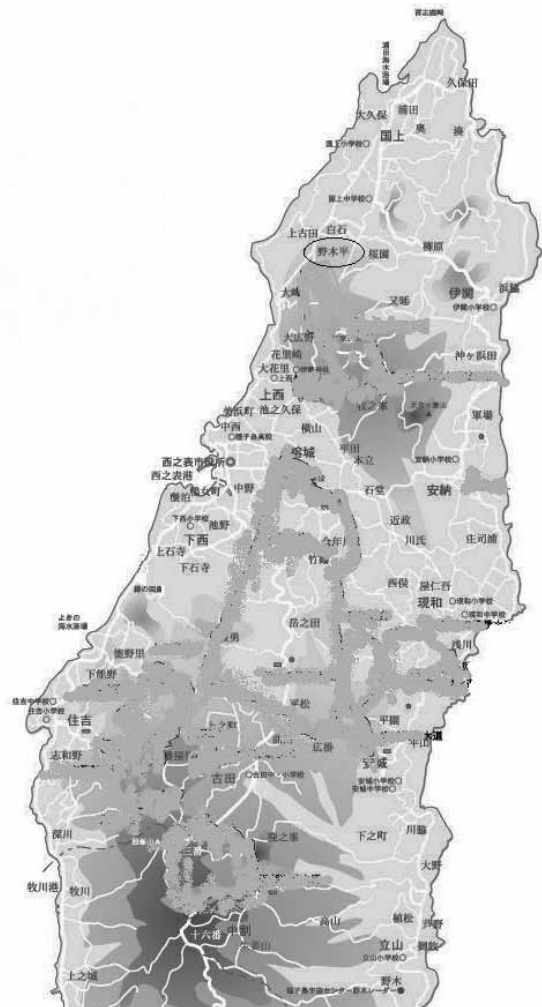


図3 西之表市地図（西之表市 HPより筆者加筆）  
○内が野木平

15 井元正流1999『種子島』春苑堂出版 p198

16 下甑村郷土誌編纂委員会2004『下甑村郷土誌』下甑村

17 移住記念碑によると、初期の入植者は8名である。

18 世帯数は、地域活性化推進員の届けによるもの。平成23年5月11日現在『市政の窓 NO.579』2011.6西之表市役所

「時維明治拾六年ヨリ続ケテ三カ年ノ台風ハ近古未曾有ノ慘事ニシテ其範圍頗ル広ク殊ニ甌島ノ災害ヲ蒙ルコト最モ甚シ家屋倒壊シ衣食ノ窮乏ヲ訴フルモノ多キニ上ル真ニ痛嘆ニ堪ヘサルナリ若シ等閑視スレバ飢餓ニ垂グニ悪疫ヲ以テシ悲惨ノ状況日々増大セントス急拠救済ノ方ヲ講ゼヌハト意ヲ決シ時ノ県知事渡辺千秋氏ノ願ヒ拾九年四月種子島ニ移住スルコトトス当時事務所長牧野篤好氏甌島戸長橋口武志氏北種子戸長上妻謙三氏国上世話役係落合十郎氏ノ配慮ニヨリ居ヲシムルニ至ル

昭和五年四月建立」

1886年から1887年にかけての移住当初は、茅葺き掘立小屋の長屋での共同生活であったと伝えられる。その生活の苦しさからか、移住者の中に信仰を求める者が多かったようである。そのため、移住してすぐに甌島より本尊（阿弥陀如来軸）を持ち込み信仰の対象としていた。



図4 移住記念碑と手打石（筆者撮影）

これは、野木平集落の住民が、甌島で真宗（一向宗）を信仰していたためである。今でこそ、真宗寺院が、甌島にも点在するものの明治に入るまでは真宗は薩摩藩内で禁止されていた教えである。そもそも鹿児島に真宗が伝わったのは、室町時代中期にあたる1505年頃といわれる。しかし、1597年（慶長2年）2月22日、第17代島津義弘によって正式に真宗は薩摩藩内において禁止される<sup>19</sup>。

その間、度重なる摘発が行われ、多くの殉教者を出しながらも1876年（明治9年）の解禁までの約300年に渡り、藩内の信者たちは「かくれ念仏」と称されるように、洞穴や山中、海上などに隠れながら真宗を信仰してきたのである。その教えを、甌島からの移住者が、種子島に持ち込んだのである。

それに対し、種子島では古代から中世初期にかけて律宗の教えが中心であったと言われる。西之表の古刹で明治初期の廃仏毀釈によって廃寺となった慈恩寺も809年（大同4年）の創建当初は律宗であった。しかし、1460年代には、法華宗が台頭している。律宗の教えは貴族仏教とも呼ぶべきものであり、その信仰は寺院内においてのみ行われるものであったため一般の島民とは直接関係のないものであった。そうした中、慈恩寺から律宗の修行に奈良に向き、その帰途に法華宗に転じたとされる日典により法華宗の布教が島内において開始されたのである。その後、日典の死後、日良によって当時の島主時氏に島内全土の法華宗への改宗をとりつけ、種子島の他、屋久島、口永良部島にも改宗の命が出されたのである。以来、明治初期の廃仏毀釈に至るまでの約400年間、種子島においては法華宗が唯一の信仰とされた。これは、江戸時代、真宗信者が秘密裏に講を中心に組織化されていた薩摩藩内においては異例であり、明治に入るまで真宗

19 西本願寺鹿児島別院 HP <http://www.hongwanji-kagoshima.or.jp/> (2013/06/08閲覧)

の教えは島内に伝わってはいなかったとされる。その様子は、鹿児島県内には珍しく「南無妙法蓮華経」と刻まれた墓石の多さから現在でも窺い知ることができる。

現在では、廃仏毀釈以後の復興により、法華宗寺院が、西之表に6ヶ寺（本源寺、日典寺、隆興寺、妙泰寺、本成寺、本立寺）、中種子に4ヶ寺（日輪寺、妙昌寺、清浄寺、定田寺）、南種子に4ヶ寺（信光寺、善福寺、本妙寺、本国寺）あり、その他無人寺が数カ所ある<sup>20</sup>。それに対し、鹿児島県内において現在主流である真宗寺院は、島内に、本願寺派寺院4ヶ寺（西岸寺、称念寺、照南寺、西光寺）、真宗大谷派（以下大谷派）寺院1ヶ寺（万徳寺）があるのみである。



図5 本源寺（筆者撮影）

しかし、寺院数でこそ劣るが、その信者数は正確な調査データはないが実勢として真宗信者の方が多いようである<sup>21</sup>。（島内真宗寺院住職談）

さらに、甕島移住者と真宗寺院の関係をみてみる。先述のとおり、明治期に入るまで真宗寺院は島内にはなかった。それどころか、真宗を信仰する者もいなかった。そうした中、種子島には1877年（明治10年）、解禁と同時に本願寺派による布教が開始された。鹿児島県本土では、西南戦争（1877年）の影響

が大きく、多くの地域で布教が1879年（明治12年）以降までずれ込んだのに比べ取りかかりが早かった。当初、西之表に説教所を設立し布教を行ったが、その中心となったのは、甕島からの移住者への布教活動であったと思われる。甕島は、江戸時代の禁制時より真宗が盛んな地域であり、その様子は後に述べるが藩内でも異質のものであった。その熱心な真宗信者が、明治期の移住政策により種子島に移住してきたのであるから、当然、真宗寺院との関係は深まる。また、当時の移住者の熱心な信仰の様子は、「小寺」制度が存在したことからも知ることができる。小寺とは、各集落において、読経や説法を行う場所の名称である。しかし、お堂を構えるわけではなく、当番住民の自宅が小寺に充てられ、住民が交代で管理運営にあたった。開拓地は、現在でこそ西之表中心部より車で十数分程度のところにあるが、当時は未開拓の地であり人里離れた山中であった。そのため、集落毎に信仰の場が必要とされたのである。

小寺は1970年代まで、西岸寺（本願寺派）系として、野木平、柳原、沖ガ浜田、軍場、川氏、石堂、平田、桃園、田之脇、平山、大野、立山、岳之田、鞍勇、七番、二本松、十三番、吉田村之町、熊野、吉住など21集落にあり、その他に万徳寺（大谷派）系の小寺として、柳原、川氏、石堂、今年川、平山、大野、吉田上之町、鞍勇、形之山など9集落があり<sup>22</sup>、そのほとん

20 西之表市編纂委員会（編）1971『西之表市百年史』西之表市長名越不二郎

21 ちなみに、1932年（昭和7年）の門徒数は、熊毛郡内において本願寺派1,375戸、大谷派756戸、興正派113戸に対し、本門法華宗は2,600戸であった。

西之表市編纂委員会（編）1971『西之表市百年史』西之表市長名越不二郎 p412

22 西之表市編纂委員会（編）1971『西之表市百年史』西之表市長名越不二郎 p413



どが、甌島からの移住者集落であった。明治期に新たな宗教として種子島に伝来した真宗ではあったが既存の宗教を改宗させるのは容易ではなかったことは想像できる。そのため、甌島からの移住者集落を中心に布教を進めたのであろう。また移住者たちは、寺院に助けを求めながらも一方で各集落において小寺を中心とした信仰を継続していったのである。

### 3. 野木平における寺院設立の経緯と現況

先述のように、甌島と種子島という信仰風土の全く異なる地域間での移住を強いられた移住者は、種子島で一般的であった法華宗ではなく、甌島で信仰していた真宗の教えを種子島に持ち込み信仰した。そのことを星野元貞は、「甌島の島民は魚をとり、殺生しなければ生計をたてることはできませんでした。しかし、それは彼らにとって悪業きわまりない行為であったのです。そうしたジレンマにおちいり、人間的罪の意識にさいなまれる人びとにとって、たやすく『逆悪の身たちながら、平生一念決定の時、如来は心光に摂められまいらせ』、『安養涅槃の都に生まれて弥陀同体の証りを開かしめ玉ふ』真宗は、たしかに彼らの現実の生活の支えとなり、魅力あるものであったに違いありません。ここに薩摩門徒が真宗禁制下にあるなおその信仰を放棄することなく、執拗に相続しつづけた一つの要因をみることができるのでしょう。」と述べる<sup>23</sup>。さらに桃園恵真も甌島の真宗信者の信仰状況を「表面はあくまで酒肴を持ち寄っての一日の行楽であるが、実は『中祖伝勸録』（『蓮如上人一代記』を三十座にわけたもの）をあらかじめ読んでおいた上手な読み手に読ませ、一同熱心に聴聞する信仰の場である。」とし<sup>24</sup>、当時の移住者の熱心な信仰の様子を窺い知ることができる。また、受け皿となるべき寺院があったことも移住者にとって、甌島での信仰を継続するには好都合であったと思われる。そのことは、西之表市内にある西岸寺の門徒の多数を占める地域が現在でも移住者集落の野木平集落であることから考えても当時の西岸寺と移住者集落との深いつながりを見とることができる<sup>25</sup>。

しかしながら、西岸寺が位置するのは西之表港に程近い西之表市の中心部であり、開拓地である野木平集落からは現在でこそ車で15分程度であるが、入植当時は、易々と通える距離ではなかった。そのことは、当時、葬儀に西岸寺住職を招く際に、葬儀会場となる喪家の他に住職が宿泊する家が設けられていたということからもわかる。この住職が宿泊する家が「小寺」であり、集落の法会の会場にもなっていた。小寺とは言っても、寺院があるわけではなく、地域住民が自由にお参りできるように当番住民宅の表の間をあてたものであった。また、小寺になった家の主人を番役（御番役）と呼んだ。

野木平の番役は旧盆に選挙し新暦の9月1日に交代していた。これは、「八朔<sup>26</sup>」にあわせて交代していたのだといわれている。種子島は8月中には稲刈りが終わる。そのため、稲の収穫を区切りとして番役を交代していたのであろう。またコーシという触役が1名他に任命されていた<sup>27</sup>。野木平の本尊は、『西之表市百年史』に、「野木ノ平小寺の本尊は明治十九年移住の

23 星野元貞1988『薩摩のかくれ門徒』著作社 pp.157-p158

24 桃園恵真1983『薩藩真宗禁制史の研究』吉川弘文館 p369

25 開教百年史編纂委員会1987『本願寺鹿児島開教百年史』鹿児島教区教務所 鹿児島別院 p791

26 旧暦の8月1日のこと。

27 西之表市編纂委員会（編）1971『西之表市百年史』西之表市長名越不二郎 p413

時に甌島手打より持ってきた阿弥陀如来像であり、立派な仏壇を設けてあり、その部屋は御番役の家の表の間を当て、部落民はいつでもそこに拝みに言ってよい。」とあり<sup>28</sup>、入植当時のものが、しばらくは使用されていたようであるが、現在はその後買い換えられた仏壇と本尊が安置されている。

また、地域住民における毎月の法会は、番役宅である小寺にて、7日、17日、27日に行われていた。この7日、17日、27日の意味するところは、真宗の宗祖親鸞の命日が旧暦の1262年（弘長2年）11月28日であり、その速夜<sup>29</sup>にあたる27日にある。その27日をもとに、すべての7のつく日に実施されるようになり、月に3日の法会となった。

しかし、その法会、小寺も時代の変化とともに維持運営が困難となってくる。それが顕著な形で現れだしたのが1960年代以降であるといわれる。1960年代とは、1955年（昭和30年）の国民生活白書に「もはや戦後ではない」とうたわれてから、さらに経済成長を続け、1960年（昭和35年）には池田内閣より「所得倍增計画」が発表され、1964年（昭和39年）の東京オリンピック開催に代表されるような大きな経済発展をみせた時代である。それは、同時に東京をはじめとする大都市での人材不足を生み、また地方で生計立てが難しくなっていた第一次産業従事者の次男や三男、そして女子の引き受け手となった。

鹿児島県においても、1964年3月に集団就職によって県外へ就職した新卒中卒者は13,959人であった。ちなみに同年の新卒中卒者の県内就職者は1,128人とどまる<sup>30</sup>。これは、離島である種子島も例外ではなく、西之表の人口は、1955年に32,527人であったものが1964年には31,389人に減少し、さらに1970年（昭和45年）には26,222人へと減少している<sup>31</sup>。

また、人口の減少とともに住民の生活スタイルにも変化がみられたのもこの時期である。西之表港が、1960年に重要港湾の指定をうけ、1966年（昭和41年）に新たに南側にバース100メートルが完工すると西之表港は、港内どこでも水深4メートル以上の港となった<sup>32</sup>。このことにより、本土より様々な資材が種子島にも入るようになった。1956年（昭和31年）には、輸入丸太の関税が全廃されており、全国的にそれまでの住宅とは様相の違った住宅建築が行われるようになっていた。港湾工事は、その流れが種子島へも流入する契機となったのである。また、それまでの大家族での生活スタイルから、集団就職などによる人口の流出により核家族化が進んだことにより、それまでのような大きな屋敷を構える必要もなくなった。さらに、マイカーが普及しはじめたこともライフスタイルを変容させた。種子島には、1951年（昭和26年）には、まだ乗用車はなかった。それが、1955年には7台の乗用車が島内を走り、1960年には、その数が93台にまで増えている。1965年には、乗用車67台、乗り合いバス36台、普通貨物自動車103台、小型貨物自動車343台、三輪貨物車7台、特殊自動車7台、原付自動車2,773台、軽自動車355台、農耕用自動車185台、自転車2,794台となり、また、バスの運行状況が、延べ運転台数8,445台、延べ走行距離数974,107km、乗客数1,776,631人であったことから考えて<sup>33</sup>、この時期、すでに島

28 西之表市編纂委員会（編）1971『西之表市百年史』西之表市長名越不二郎 p141

29 命日前夜のこと。

30 鹿児島県1964『鹿児島県勢要覧 昭和39年』鹿児島県

31 西之表市 HP <http://www.city.nishinoomote.kagoshima.jp/jinkou/jinkou.html> (2013/06/18閲覧)

32 西之表市編纂委員会（編）1971『西之表市百年史』西之表市長名越不二郎 p141

33 数字はすべて西之表市編纂委員会（編）1971『西之表市百年史』西之表市長名越不二郎

内を自由に移動することが可能であったと考えられる。

こうした社会変化の中、野木平集落では、それまで選挙により小寺（番役）を選出してきたが、大人数が集う部屋がないなどの住居の問題、また、世帯住民の高齢化により職務の遂行が困難であるといった理由により、選挙で小寺に選出されても辞退する者が増えてきた。

確かに、月3日の法会の開催、さらに僧侶が必要とされる報恩講や葬儀の際の僧侶の接待、また時には若者への正信偈<sup>34</sup>の指導も行わなければならないことなど考えると負担は少なくない。また、報恩講が11月27日までの7日間開催されていたことも大きな負担であった。さらに、小寺では、このほかにも、毎月の婦人会活動、毎週土曜日の子どもを対象とした幼年会、4月3日の花見、7月29日のお色干し<sup>35</sup>などが行われていた。

そうした中、1978年（昭和53年）ごろ、いよいよ小寺制度も限界を迎える。しかし、同時期、他の地域から小寺が消滅するのに対して、野木平集落では、逆に「お寺をつくらう」という気運が高まる。当時の様子を住民に振り返ってもらって「小寺を維持するためには、他に方法はなかった。」「小寺の受け手がなくなったから仕方がない。」と語られ、当時の住民が小寺継続を強く望んでいたことがわかる。そして、住民より寄附が募られ1980年（昭和55年）に「信楽寺」が建立されたのである。名前の命名は、西岸寺住職（野田久教）によるものであった。

そのときに、あらたに決められたルールは、それまで月に3日行われていた法会を、毎月17日の1日とする。報恩講も、それまでの7日間から毎年11月27日の1日だけの開催とし、西岸寺住職に依頼する。その後、運動会を開催（現在は、老人会を開催）。7月29日のお色干しも西岸寺住職に依頼し、高齢者は、信楽寺の仏具の手入れを行い、その間に若者は三ツ瀬の浜にいて魚をとり当日夜、料理を振る舞うとされた。それまでの行事を基本的には引き継ぎつつも、婦人会の定期開催、そして子どもが少なくなったこともあり、幼年会の開催が中止された。つまり、番役や住民の負担を軽減させながらも小寺を寺院へと発展させたのである。

現在は、信楽寺の責任者（番役）を自治会長が兼任することになっており、毎月の法会や地域行事を取り仕切っている。あわせて、西岸寺門徒講費とともに、信楽寺の光熱費などの維持



図6 現在の法会の様子（筆者撮影）



図7 信楽寺（筆者撮影）

34 真宗において、一般信者が唱えることが多い偈文。

35 真宗禁制時代に、洞穴に隠した仏具を虫干ししたことに由来する法会と言われている。



図8 法会後の飲食（筆者撮影）

費として各戸2,400円を徴収している。

なお、毎月の法会はCDにあわせ、正信偈の読経、領解文唱和、恩徳讃唱和を行う。その後、出席者全員によって飲食が行われる。このときは、婦人会の担当のものが、季節の野菜を煮付けた料理や菓子などを出し、お茶やビール、焼酎が振る舞われ、住民の懇親の場となっている。

#### 4. 継続された「小寺」、廃止された「小寺」

『西之表市百年史』によれば、1970年（昭和45年）頃までは、西之表市内に本願寺派の小寺21ヶ寺、大谷派の小寺9カ所が確認されている<sup>36</sup>。しかし、今回継続が確認されたのは、信楽寺を運営する野木平集落のみであった。

各小寺が消滅に至った理由は、野木平集落において問題にされたことと同様のことが語られる。それは、1960年代に顕著に見られた若年層を中心とした本土への人口移動である。それにより西之表市の人口は減少し、地域社会の構成員もまた減少した。またそれにあわせ核家族用の間取りを取り入れた住宅の普及が、地域住民が番役宅に集まることを難しくさせた。さらに、島内の交通機関の発達が住民の行動範囲を広げたことは先述のとおりである。西之表市は東西には8.2キロメートルしかなく、自動車を使用すれば20分程度で横断できる。また南北にも25.2キロメートルしか離れておらず、移動距離としては決して広くはない<sup>37</sup>。

西之表市の今回の調査では、各小寺の消滅の経緯について詳しく知ることは出来なかった。伝承として小寺があったことは伝わっているものの消滅から50年ほどが経過していること、尚且つ消滅過程が曖昧であり、いつの時点で消滅したのか確定することが困難なことが理由にある。しかし、西之表市から南に約50キロ、車で1時間ほど離れた南種子町の西海地区・牛野集落の小寺から小寺消滅の経緯を伝承の中に、おぼろげではあるが知ることができた。南種子町は、種子島の南端に位置し、ロケット打ち上げ基地である種子島宇宙センターがあることで知られる人口6,232人の町である<sup>38</sup>。その南種子町の西側海外沿いに牛野集落はある。牛野集落も野木平集落同様に1886年に実施された移住政策によって下甌島（長浜地区）からの移住者によって形成された集落である。当時、8戸の家族が移住したが<sup>39</sup>、その後、約100年の時を経て、途中、下甌島へ帰る者、種子島内で移住する者、子孫が途絶えた者などあり、現在では3家族（中川家・中村家・町家）7世帯が暮らす集落となっている。

36 西之表市編纂委員会（編）1971『西之表市百年史』西之表市長名越不二郎 p413

37 西之表市 HP <http://www.city.nishinoomote.lg.jp/outline/outline.html>（2013/08/11閲覧）

38 南種子町 HP <http://www.town.minamitane.kagoshima.jp/outline.html#01>（2013/09/05閲覧）

39 南種子村役場（編）1942『南種子村沿革史』南種子村役場 p73



図9 南種子町地図(南種子町HP)

この牛野集落も、やはり下甌島にて信仰していた真宗を継続信仰するために下甌島より本尊を種子島に持ち込んでいる。現在も当時の本尊が現存し、裏書きに「釋本如」と書かれていることから約200年前に本山より下付された本尊であることがわかる。そして、現在3家族7世帯で1年毎に小寺を決め、本尊を持ち回り、番役が朝夕欠かさず給仕を行っている。但し、現在の牛野集落における小寺制度は、入植当時から継続されてきたものではない。1991年(平成3年)に、中川家に保管

されていた本尊に家族が気づき集落で協議の上、本尊を修復し、それを機に小寺制度を復活させたのである。その際の修復費用は、3家族の寄附によりまかなわれている。牛野集落の中川スマ氏(取材当時91歳)は本願寺新報の取材に対し、「父は小さな教本を持って朝夕、欠かさずお参りしていた。『清浄光明ならびなし』の声を今でも覚えている。」と回想しており、確かに小寺が存在していたことがわかる<sup>40</sup>。しかし、現在80代の女性は、「私が嫁に来たときはすでになかった。」とも語り、おそらく他の集落同様に、1970年代ごろには小寺制度そのものは消滅し、その後本尊だけを中川家で保管するようになったものと考えられる。現在、復活した小寺での番役の役割は、荘厳の飾り付け、仏飯の支度など給仕に限定され、法会を行う際は、近隣の真宗寺院である照南寺に導師を依頼している。

この牛野集落で小寺が一度消滅した大きな要因は、過疎による地域コミュニティの崩壊にあると言える。つまり、世帯数の減少が輪番による小寺の継続を消失させた要因と指摘できるのである。そのことは、これからの課題として、住民によって語られる過疎への不安から窺い知れる。住民の中川甚次氏は、「持ち回りは、今後数年でふたたび廃止されるであろう。」と語り、その理由を後継者不在にあると指摘する。確かに、3家族7世帯の高齢者のみの集落であり、今後の維持管理が困難なことは容易に想像できる。また、過去においても、そのことが小寺存続の弊害であったと考えられる。地域集落が消滅しようとしている中、小寺の存続が危ぶまれることは、どの地域においても仕方がないことかも知れない。

そのように考えると「人口の減少=小寺の消滅」は当然の帰結のように思われる。しかし、稀なケースであるとしても信楽寺は小寺から寺院へと発展し得たことは注目に値する。なぜ信楽寺は、他集落がたどった消滅への道ではなく、寺院建立の道を歩めたのであろうか。次ぎに考察を加える。

## 5. 考察

本論では、小寺から寺院へと発展した野木平集落の信楽寺の事例を中心に、寺院存続の可能

40「本願寺新報」第2928号2007年5月10日

性を「地域社会をつなぐ媒体」としての寺院の役割を念頭に置き論じてきた。種子島では、1970年代にそれまで継続されてきた小寺制度が限界を迎えたことを確認し、交通インフラの整備、住居環境をはじめとするライフスタイルの変化、人口の減少を小寺消滅の要因として指摘した。しかし、それは、なにも種子島に限った現象ではない。一足先に都市化が進んだ本土においてもそれは同じであった。同時期の本土の様子を千葉乗隆は、鹿児島島の講道場の考察の中で、「現在、人口の都市集中にともなう、過疎農山村の増加等によって、農山村に基盤をおく真宗寺院の経営危機が問題となっている。」と指摘している<sup>41</sup>。さらに森岡清美も北陸地方を中心とした真宗寺院の特徴的制度である寺中制度<sup>42</sup>に対し、「本坊・寺中下道場の関係は解体への方向を巡りながらも解体しきれず、弛緩しつつ存続している。」と指摘する<sup>43</sup>。種子島における小寺制度もまた、本土同様に寺院制度の変革期にあったといえる。

では、その時期の社会状況の変化とはどのようなものであったのであろうか。一つには、先に指摘のとおり、高度経済成長期における、全国の地方から都市部への人口移動がある。また、社会の近代化が日本人の生活スタイルをそれまでの地域共存型から個人自立型へ変貌させたことも要因の一つと考えられる。そして、そのことが都市部、地方ともに、地域のつながりを弱めることとなった。さらに地域の住民同士のつながりの喪失が、地域のコミュニティ内にて実施されていた伝統的宗教行事への住民参加を遠ざけるものとなったと考えられる。また、同時期の交通手段が整備された状況下において、自らが必要なときに寺院に個人（家族単位）で出向くということが容易となっていたことも、宗教行事の個人化に発車をかけることとなった。そうした状況が、本土のみならず離島である種子島でも起こっていたのである。

このことを今一度、ソーシャル・キャピタルという概念から考察してみる。このソーシャル・キャピタルという用語は、古くは、1915年頃からアメリカで使用されるものである。このソーシャル・キャピタルの概念について、パットナムは、「社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範である。」と定義する<sup>44</sup>。つまり、人と人との関係性、そしてそこに生まれる信頼関係を表わした用語である。そして、この地域におけるソーシャル・キャピタルを強固なものとするための媒体として寺院が機能することが、寺院自体の存続にもつながると、先の櫻井は期待を込めるのである。

しかし、本論で取りあげた信楽寺の事例から考察をすすめると、必ずしも地域をつなぐ媒体としての寺院の役割のみを要因として、寺院の建立、そして継続につながったとは言いきれない。先述のとおり、他の集落では小寺制度は1970年代までに消滅している。詳細な消滅過程については、本論において明らかにできなかったが、高度経済成長という大きな社会変化の中で、地域のつながりが減少してきたことに要因があることは指摘できた。つまり、地域のつながりの中において存在し得た小寺制度であったが、地域のつながりの消滅にあわせて小寺制度もまた消滅していったと考えられるのである。

41 千葉乗隆1969「真宗道場と道場主—とくに薩摩地方の諸道場について—」『龍谷大学論集』（391）龍谷大学

42 親寺（本坊）と親寺の法務をサポートする子寺（寺中）とが存在する制度。

43 森岡清美1962『真宗教団と「家」制度』創文社 p393

44 ロバート、パットナム.D. 2006 柴内康文（訳）『孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生—』柏書房

ここで言う地域のつながりとは、一つには出身地を同一とした移住者同士のつながり、そして、交通機関の未発達により隔離された閉鎖的地域内に住む者同士としてのつながりのことである。また、協業による農作業や地域行事などの運営といったものも地域のつながりを維持するのに大きな役割を果たしていたと考えられる。しかし、それら地域のつながりも高度経済成長期には減少、消滅にむかっていたことがわかる。例えば、地域の婦人会活動も小寺制度同様に縮小傾向にあった。戦後の西之表市の婦人会は、1946年（昭和21年）に、それまでの西之表町国防婦人会をもとに、主婦のみを構成員とした自主的・民主主義的運営をめざし新たに設立された。それまでの官製婦人会と違い、入会脱退は自由であったが、慣習的に地域集落行事への奉仕が活動の中軸となっていた。それが、1967年（昭和42年）頃から、婦人会活動が次第に萎縮し、組織困難な集落が出始めてきたのである<sup>45</sup>。このことから、当時、地域のつながりが縮小傾向にあったことが見てとれる。婦人会活動さえも活動困難となるなか、自宅を寺院（集会場）とする小寺制度は、その煩わしさ、そして宗教行事が個人化する中で消滅にむかうことは容易に想像できる。

ではなぜ、野木平集落の小寺制度のみが、建物を持たない一制度から寺院建立という形で発展できたのであろうか。一つには、それまでの地域のつながりが、他の地域より強固であったことがあげられる。例えば、野木平集落では、近年まで集落内において運動会が実施されてきた。校区毎による運動会の開催はあるものの、集落内において運動会を実施する集落は他には見受けられない。また、現在では信楽寺のおいろ干し行事とあわせて行われている集落内全員による共同飲食もまた野木平集落の特徴行事のひとつである。さらに、2005年からは甌島に伝わるトシドン<sup>46</sup>も復活している。トシドンとは、大晦日の夕方、信楽寺に青壮年、中学生が集まり準備の後、衣装をまとい、各家庭を巡回する行事である。このように、野木平集落においては、信楽寺建立以前から地域のつながりが強固に発達しており、それは今日に至るまで継続されているのである。その様子は、住民へのインタビューからだけでなく、『西之表市百年史』にも記載されるどころである<sup>47</sup>。では、野木平集落のみが、なぜ強固な地域のつながりを築けたのか、幾つかの要因を指摘できるが、大きな要因は、先にも触れた集落の関係性、信頼性を緊密にする多くの地域行事の遂行であろう。そして、その中心に住民の信仰の支えであった「小寺」があったことにも注目する。このことを、パットナムは、「人びとが共に祈る信仰のコミュニティは、米国の社会関係資本の蓄積において、唯一最大の重要性を持つ。」と指摘しているとおり<sup>48</sup>、地域住民が、共に小寺に集まり経を唱える行動の重要性を指摘できる。まさに、地域社会をつなぐ媒体としての小寺の役割をここに知ることができるのである。

現在、野木平集落の住民は、月に1度、信楽寺に集まり、共に経を唱え、そして飲食を共にすることにより、互いの近況を語り合い、関係性を強めることができる。また、日程も毎月17日の午後6時半からと決まっており、集落住民の祥月命日の法要を兼ねることにより多くの住

45 西之表市編纂委員会（編）1971『西之表市百年史』西之表市長名越不二郎 p375

46 甌島に伝わる大晦日の行事である。2009年にユネスコ無形文化遺産に登録されている。

47 西之表市編纂委員会（編）1971『西之表市百年史』西之表市長名越不二郎 p413

48 ロバート、パットナム。D. 2006柴内康文（訳）『孤独なボウリングー米国コミュニティの崩壊と再生ー』柏書房 p73

民が集まりやすい環境となっている。さらに、集落住民全員による共同飲食行事など様々な地域行事も信楽寺行事とあわせて実施されることにより、単なる地域行事から信仰を持ち合わせた行事へと変換されており、より強い参加意識を地域住民に与えているといえる。つまり、過去においては小寺が、現在では信楽寺が、野木平集落において地域をつなぐ媒体としての大きな役割を果たしている指摘することが出来るのである。

しかし、その一方で、地域をつなぐ媒体としての役割が信楽寺の建立、存続に決定的な影響を与えたかという点必ずしもそうとは言えないことも先に指摘した。それは、信楽寺を建立せしめたものが、信楽寺以外のところにある強い地域のつながりによるものであったとも考えられるからである。つまり、野木平集落において、信楽寺が建立、継続が可能であったのは、信楽寺の持つ地域をつなぐ役割だけでなく、地域の元来持つつながり（信楽寺以外の地域をつなぐ媒体）との相互性によって成り立っていたと考えられるのである。仮に、運動会や共同飲食行事といった、その他の地域をつなぐ媒体が廃止もしくは実施されていなかったとするならば、信楽寺の建立もまた、無かったものと考えられるのである。

つまり、野木平集落のみが、それまで施設を持たないコミュニティ組織であった小寺制度を施設の備わった寺院へと発展させ、なおかつ他の地域において小寺が消滅して以後50年近くにわたり継続できた要因を地域のつながりが寺院以外の場においても数多く存在していたことに求めるのである。それは、地域での運動会であり、幼年会、婦人会など様々な分野に及ぶ。また、同じ下甕島（手打地区）出身の祖先を持つという同郷意識もまた地域のつながりを強固なものにしている。また一方で、現在、毎月の法会に加え、老年会や共同飲食の場であるお色干し、トシドンなど様々な行事が継続されている要因に、信楽寺の存在があることも確かである。一般住民宅にて地域住民が集まり様々な行事を執り行うことが困難である現状では、互いに集える場があれば、住民が集う機会も当然増加する。

つまり、信楽寺の建立は、寺院がもつ地域をつなぐ媒体としての役割によるものであったと考えるよりは、むしろ、地域の持つ他の媒体の力より寺院が建立されたと理解するべきであろう。しかし一方で、法会や共同飲食行事などの地域が元来持つ媒体の継続のためには、今度は建立された信楽寺の地域をつなぐ媒体としての役割が大きな働きとなったことも指摘できる。つまり、寺院の持つ地域をつなぐ媒体としての役割と、その他の地域が元来持つ地域をつなぐ媒体とが相互に補完されたからこそ寺院の継続、そして地域行事の継続へとつながったと理解できるのである。このことをもう少し掘り下げて考えるならば、信楽寺が地域の元来持っている地域のつながりを維持するための地域行事などの媒体をうまく取り込むことが出来た事例であると言える。これは、多くの地域にみられる神社の有り様とも重なる。地域の神社は、神主が常駐しているところは少なく、その多くは地域社会によって支えられている。そして、地域の祭りなど地域をつなぐ媒体（行事）を取り込むことにより神社もまた存続しているのである。

つまり、櫻井の示した過疎地域における寺院経営を、地域のソーシャル・キャピタルを維持する媒体としての役割に求めることは、一方では有効なものであると言える。しかし、それには地域における、寺院以外のソーシャル・キャピタルを強固にする媒体の存在が不可欠であり、またそれを寺院がうまく取り込むことが必要であるといえる。このことを、寺院経営の立場から考えてみると、寺院が、地域の潤滑油のように地域住民同士や他の地域の住民と地元住民を



結びつけるような橋渡し型の役割を果たすために、様々なイベント、法会を実施することは可能である。しかし、それは寺院を超えてつながっていくものであり、寺院を介したつながりとはなりにくい。それに対し、同じ信仰を紐帯とした者を報恩講法要や彼岸会法要を通じ互いの関係を深めあう場として寺院が活用されるならばどうであろう。この結合型の役割こそが、寺院を媒体とし、寺院を介したつながりとなり得るものである。もちろん、橋渡し型、結合型のどちらか一方のみで成り立つものではない。ただ、寺院経営という立場で捉えるならば、やはり結合型のあり方を目論むべきであろう。しかし、本論で明らかにしたように、寺院が持つ地域をつなぐ媒体としての役割のみで寺院は継続されるものではない。そのためには、地域の基盤にあるネットワークや信頼関係といった、寺院以外の媒体の存在が重要となる。もちろん、寺院の地域をつなぐ媒体としての活動を基盤に地域のネットワーク、信頼といったものを構築していくことも可能であろう。しかし、他集落において小寺が継続されなかったことから鑑みて、小寺（寺院）が単独で地域をつなぐ媒体として機能することは難しいと言わざるをえない。いずれにせよ、寺院の持つ地域をつなぐ媒体としての役割、そして地域の元来持つ地域をつなぐ媒体が互いに補完してこそ寺院は継続経営されていくのである。

つまり、今回の事例調査では、寺院が地域をつなぐ媒体として存在しうる可能性を指摘することは出来た、しかし、それが寺院継続の決定的な要因であるとは言い切れなかった。それは、寺院もまた地域のソーシャル・キャピタルを維持するための媒体の一端であり、その他の地域をつなぐ媒体との相互性の中でこそ存続できるものであると考えられるためである。つまり、地域の元来もつながりが微弱であれば、寺院のもつ地域をつなぐ媒体としての役割も自ずと微弱なものとなると考えられるのである。それは、パットナムが、米国の教会を例に、「21世紀の幕開けにあたり、米国人は30～40年前と比べて教会に行かなくなり、また通う教会もそれから広がるコミュニティへの関わりを減らしつつある。宗教生活におけるこの傾向は、世俗的コミュニティにおける社会的つながりに見られる不吉な減少を、埋め合わせているというよりもむしろ強化してしまっている。」と指摘するように<sup>49</sup>、世俗的社会活動への関与の減少は、宗教的社会活動への関与の減少とつながり、また、宗教的社会活動への関与の減少もまた世俗的社会活動への関与の減少へつながるのである。

## 6. まとめ

本論では、現在懸念されている過疎地域における寺院経営の可能性について考察を深めてきた。事例として取りあげた種子島の信楽寺は、地域住民の手によって建立された寺院であり、僧侶が専従しリーダーシップを発揮する寺院とは違い、地域住民が主体となって経営される寺院である。宗教法人としての登記こそ行われていないが、地域住民から「お寺」と親しまれる地域に根付いた寺院である。その様子は、道路地図<sup>50</sup>にも寺院名として掲載されていることか

49 ロバート、パットナム、D. 2006 柴内康文（訳）『孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生—』柏書房 p89

50 『鹿児島県道路地図』2013昭文社

らも垣間見ることができる。

そして、その信楽寺の建立、継続に地域をつなぐ媒体としての寺院の役割が有効に働いていたことを本論において確認した。しかし、寺院が発揮する媒体としての役割のみによって、寺院の建立、継続が可能であったとするならば、その他の集落にあった小寺も野木平集落同様に存続し得たはずである。しかし、野木平集落以外の地域の小寺は消滅した。しかも、消滅時期さえ確定することができないほど静かに消滅したのである。これは、パットナムが、『孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生—』の冒頭で、「ペンシルバニア州グレンバレーのブリッジクラブが、いつ、なぜ解散してしまったのか正確に語れるものはいない。」と述べているように社会変化の中におけるコミュニティ組織の衰退の様子である。しかし、信楽寺は、自らの持つ地域をつなぐ媒体としての役割とともに野木平集落が元来持つ地域のつながりとの相互性を保てたことにより建立され、また継続されてきたのである。

本論において、櫻井の示した寺院のソーシャル・ネットワークを支える媒体としての可能性は大略確認できた。しかし、一方で、限界集落に存在する「限界寺院」に対する寺院経営の決定的な解決策とはなり得ないことも確認できた。それは、牛野集落の住民のみならず野木平集落の住民も不安視していることが、「後継者不在」の問題であるという点にある。いくら寺院、小寺を現在は存続し得たとしても次世代においては、困難ではないかと住民たちは考えているのである。今後、寺院が、地域をつなぐ媒体としての役割を果たし得たとしても、そこに住む住民がいなければ寺院を継続することは難しい。もちろん、頼る人のいないところに寺院が存在する必要もないと言えばそこまではあるが、限界集落における寺院経営については今後の研究に課題を残すところとなった。

## 参考文献

井元正流2011『種子島』春苑堂書店。

開教百年史編纂委員会1987「本願寺鹿児島開教百年史」鹿児島教区教務所 鹿児島別院。

櫻井義秀2012「過疎と寺院」大谷栄一・藤本頼生（編）『地域社会をつくる宗教』pp.130-154 明石書店。

下甕村郷土誌編纂委員会2004『下甕村郷土誌』下甕村。

千葉乗隆1969「真宗道場と道場主—とくに薩摩地方の諸道場について—」『龍谷大学論集』(391) pp.25-47龍谷大学。

西之表市編纂委員会（編）1971『西之表市百年史』西之表市長名越不二郎。

星野元貞1988『薩摩のかくれ門徒』著作社。

星野元興2013「真宗寺院にみる廃寺の現状—鹿児島県，富山県，広島県の事例から—」『地域政策科学研究』第10号 pp.121-139鹿児島大学。

南種子村役場（編）1942『南種子村沿革史』南種子村役場。

桃園恵真1983『薩藩真宗禁制史の研究』吉川弘文館。

森岡清美1962『真宗教団と「家」制度』創文社。

ロバート，パットナム，D. 2006柴内康文（訳）『孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生—』柏書房。

## 参考資料

『鹿児島県道路地図』2013昭文社。

『月刊宗報7月号付録』2008「第9回宗勢基本調査中間報告（単純集計）」浄土真宗本願寺派。

『市政の窓 NO.579』2011西之表市役所。

『宗教年鑑 平成22年版』2011ぎょうせい。

『寺院名簿編纂委員会』1978本願寺出版部。

『浄土真宗本願寺派寺院住所録』2009浄土真宗本願寺派。

『統計にしのおもて』

<http://www.city.nishinoomote.kagoshima.jp/jinkou/jinkou.html> (2013/08/05閲覧)。

総務省 HP (過疎対策)

[http://www.soumu.go.jp/main\\_sosiki/jichi\\_gyousei/c-gyousei/2001/kaso/kasomain0.htm](http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/2001/kaso/kasomain0.htm)  
(2012/09/21閲覧)。

種子島観光協会 HP <http://tanekan.jp/tanegashima.html> (2013/08/05閲覧)。

西之表市 HP <http://www.city.nishinoomote.lg.jp/outline/outline.html> (2013/08/11閲覧)。

文化庁 HP 「第157回宗教法人審議会議事録」

<http://www.bunka.go.jp/shukyouhoujin/shingikai/gijiroku157.html> (2012/05/22閲覧)。

南種子町 HP <http://www.town.minamitane.kagoshima.jp/outline.html#01> (2013/09/05閲覧)。

「福井新聞」2010年8月4日。

「本願寺新報」2007年5月10日。

原稿受領日：平成25年10月2日；Received 2 October 2013

掲載受理日：平成25年11月12日；Accepted 12 November 2013